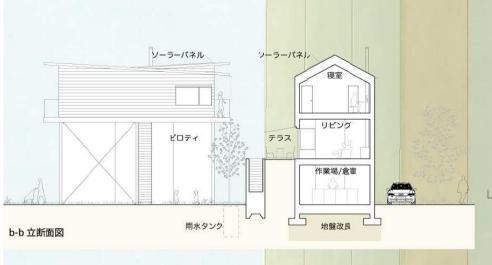


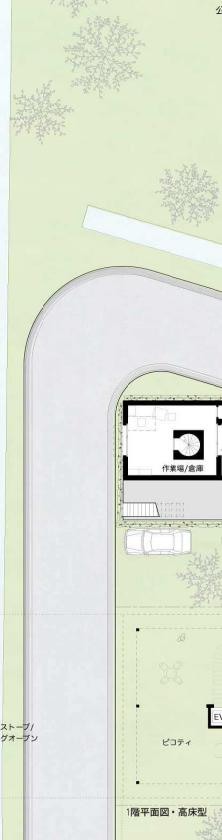


日光川左岸土手

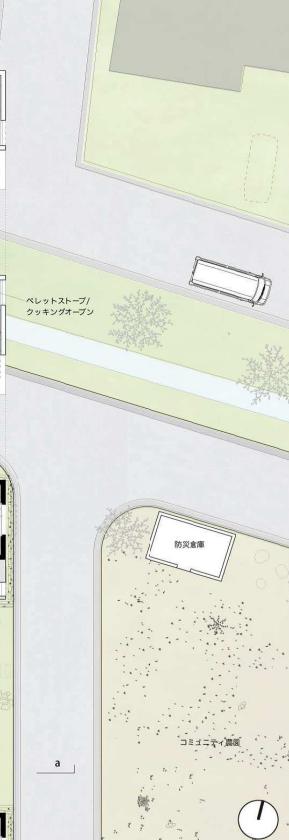
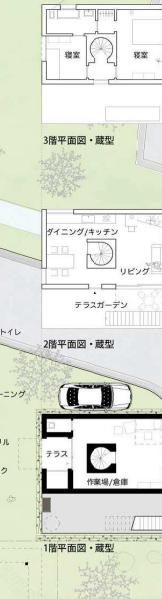
洪水路



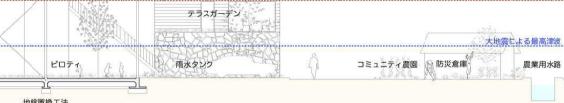
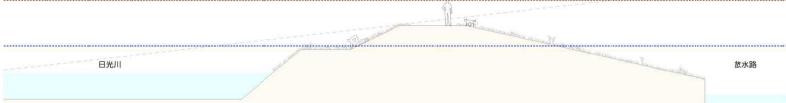
2階平面図・高床型



公園



100年に一度の最大洪水水準



水と生きる家

津島市の歴史は川の流れと共にあり、その居住文化は治水と共に育てられてきました。ここでは防災・減災に主眼を置きながら、水と共に生きる居住文化を尊重した津島型住宅モデルを提案します。

高床型モデルでは、建築面積を抑え地盤改良工事を用いることで地盤改良工事を省き、鉄骨造の高床式構造に大屋根平屋を組み合わせることで最大浸水深度よりも高い位置にすべての住環境を設定します。常に日光川の川面を眺められることで生活と川とのひとつの環境認識のなかで成立し、居住環境と防災への理解が促されます。

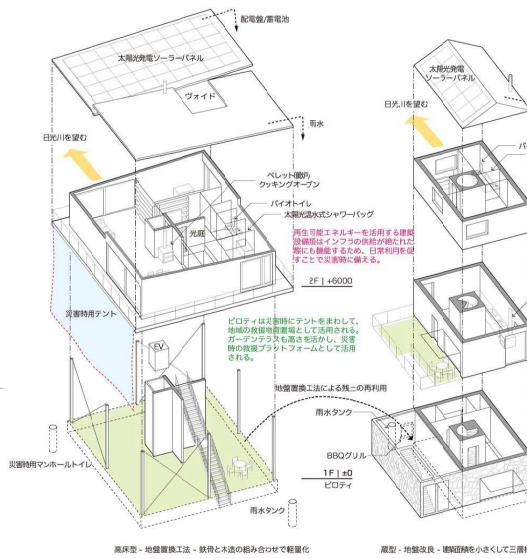
藏型モデルでは、建築面積を抑えることで地盤改良工事を最小限化し、直角方向に居室を積層することで浸水対策と十分な居住面積を確保します。各階の用途は浸水リスクとの関係から最適化され、最も階からは日光川の眺望も得られます。また災害時にも有効な、残土からなるガーデンテラスを備えます。

そして、これらの住宅では再生可能エネルギー（ソーラー発電、雨水利用、ペレット暖炉、バイオトイレなど）の日常的な利用を促すことで、災害時ににおいても有効な設備計画としています。

地上レベルの建築面積が小さいため、通常より広い面積を確保できます。また垣根がなくともプライバシーが得られるので、各居室の庭を連続させることで公園のような一体感のある居住環境を実現され、隣接するコミュニティ農園と併せて地域住民の交流および地域防災の人基盤の形成が期待されます。

防災・減災のための住宅モデルダイアグラム

敷容地盤がもたらす不同干下と液状化現象への対応、そして大地震やスマート風による浸水被害への対応。これらが津島市における防災計画上の大きな課題となっています。高床型モデルでは地盤改良工法を用いることで工費を抑え、住宅の機能性を最大浸水深度よりも高い位置に設定します。藏型モデルでは建築面積を抑えることで地盤改良の負担を軽減し、浸水リスクに応じた階層構成としています。また再生可能エネルギーの積極導入により自然環境への関心を高めると同時に、災害時にインフラの供給が絶たれた場合であっても機能する住宅としています。そしてすべての住宅から日光川の眺望が得られることで、水辺環境の利点を住環境に取り入れ、暮らしのなかに日光川があると認識することが防災意識の向上に寄与します。



配置イメージ

既存地モデル・高床型モデルともに地上レベルでの占有が小さくなっています。通常の住宅地よりも広い道が確保されています。それらの道を活用することで長軸方向では全住戸を規制するオープンスペースが確保でき、ここを中心に住民同士の交流が促されます。また土手からコミュニティ農園に接する短軸方向には連携性が得られます。また(△)内の道路をそのままつなぐ機能性が付与されます。



高床型モデル内観イメージ



藏型モデル内観イメージ



配置計画・鳥瞰イメージクライメイク

高床型モデルと藏型モデルを斜めかたに配置することで、全住戸から日光川の眺望が得られるよう計画されています。各住戸の庭を連続させることで、長軸方向を縮短するオープンスペースが確保され住民との日常的な交流を促します。これは地域コミュニティの強化が災害時の地域防災において重要な役割を果たすとの考えに基づくものです。また短軸方向では日光川の土手から住戸を経てコミュニティ農園に至る地上レベルの連続性により、川岸に特徴的な地勢がこの地帯を特徴付ける重要な要素であることが顕在化されます。

